



ブックレビュー

生物と無生物のあいだ

子ども教育学科教授 千葉和男

フェルメールをご存じだろうか。柔らかな光が窓から射し込む室内で楽器を弾いたり手紙を読んだり家事する女性を静謐な筆致で描いた17世紀オランダの画家。代表作の一つ「青いターバンの少女」と呼ばれる「真珠の耳飾りの少女」という作品を知っている人も多いかと思いますが、長い間忘れられていたのですが19世紀に再び注目を浴びるようになり、いまや「モナリザ」と肩を並べるぐらいに世界中で知られ愛されています。現存する作品は35～6点と言われていて、その本物を見ることはなかなか難しく、一昨年、東日本大震災後の東北応援ということで3点ものフェルメールの作品が宮城県美術館に来たことをご記憶の方もおられると思いますが、実は「ミロのヴィーナス」が日本に来たぐらいの大出来事でした。

『生物と無生物のあいだ』の著者、福岡伸一氏は世界的に著名な分子生物学者ですが、一方日本人で唯一その大半の33～4点の現物の作品を見たというフェルメール研究者としても有名です。いま話題の生命科学の遺伝子研究の第一人者が何故に芸術家に関心を持ちその研究にも情熱をかたむけるのか？

本書はタイトルのように「生命とは何か」ということをDNA研究を通じて解き明かそうとしたことと、その半生、その研究世界の实態について書かれたものでノーベル賞争いの実相なども書かれていてとても興味深いのですが本書ではフェルメールに関してほとんど触れていません。(他著たとえば集英社新書の『知の挑戦：本と新聞の大学Ⅱ』の中の「フェルメールと動的平衡」という章などで書かれています。)

しかし本書では記してないのですが氏の「科学と芸術のあいだ」ということについての考えが読み進めるにつれ見えてくるというふうになっています。「わたしたちは何処からきて、わたしたちは今何処に居て、わたしたちは何処にいかようとしているのか」画家ゴーギャンの言葉です。このことは科学と芸術が共通に持っている命題を語っているように思いますが、その点で福岡伸一氏がフェルメールに強く惹かれその研究者となっているということがよくわかります。

この本以外に美術に関心のあるひとには堀田善衛著『美しきもの見し人は』を、これから教員を目指す学生の皆さんには灰谷健次郎著『兎の眼』をぜひお薦めしたいと思います。ついでにちゃっかり書いちゃいますが永井画廊刊『千葉和男画集』はなかなか見応えがありますよ。図書館でちょっと手にとってみてください、紹介しちゃう。

※ 堀田善衛著『美しきもの見し人は』、灰谷健次郎著『兎の眼』は、仙台市図書館に所蔵、『千葉和男画集』は本学図書館に所蔵しています。



『生物と無生物のあいだ』

福岡伸一 著
講談社現代新書

所 在： 学生閲覧図書コーナー
請求記号： 460.4/フク/学関

図書館 日記

～ フロア展示「図書館を歩く」～

2Fフロア等で展示を行ってから3年目を迎えます。展示資料を学生が閲覧したり貸出をしたりする姿をみれば、それを励みに親しまれる展示を目指しています。

先日、カウンターで新入生と思われる学生から「ノートを取り方など書いてある本はありませんか？」と相談を受け、…大学の講義ではノートのとり方が難しいのだろうと想像しながらOPACで検索してみると、その時には「これだ！」と思うような資料には出会えませんでした。

5月8日(木)から6月30日(月)まで開催している展示は、「図書館を歩く」をテーマにレポートや論文作成に役立つ資料を中心に展示しています。初めてレポートを書く新入生やレポートや卒論に苦戦をしている在學生に、お勤めの展示です。

昨年にも同様の展示を行いました。今回の展示は、「学習マニュアル」というコーナーを設けました。大学で何を学ぶか、また講義の聞き方やノートのとり方など大学で学ぶ上で必要な能力の他に、レポートを書く技術を知ることができます。

「資料を見つける」というコーナーでは、レポートを書く上で必要な情報を得るためのツールの紹介や探す力を身につけるための図書が展示してあります。

レポートや論文を作成する上で、書く事以外に、普段の講義でノートの取り方を工夫したり、図書館にあるレファレンスコーナーやデータベース等も利用したりして、図書館をうまく活用してほしい。「優」の評価につながるかも…?

今後も利用者の声を取り入れながら展示に取り組みたいと思います。

(閲覧係：五十嵐智子)



司書の プロムナード

～ 昔話を楽しむ ～

「小沢俊夫 昔話へのご招待」というラジオ番組をご存じだろうか？私は仕事帰りの車中でこの番組と出会い、昔話研究者である氏の語る昔話の世界観に引き込まれてこの本を手にとった。

昔話というところには道徳的教訓が多く含まれていると思われがちであるが、そういう話はごく少数で、むしろ広く人間一般のことや子どもの成長を語っている方が多いという。この本で著者は自身の教育者としての観点も交えながら、特に「子どもはいかに成長していくか」をキーワードとして、昔話が大人にこそ多くのメッセージを語りかけていることを教えてくれる。

例えば、日本各地に伝わる「わらしべ長者」の話。これは単に“物々交換で大儲け”の話ではなかった。できそこないの三男が、父から貰った藁を蓮の葉っぱ、味噌、名刀と交換していき最後には長者の婿となる話であるが、これは、子どもは自分が獲得して持っているものとちょうど合致するものに出会ったとき、初めて次の段階を有効に進むことができる、というように抽象化できるという。なるほどである。

便利で効率的な現代であるが、子どもの成長するプロセスは昔話の時代と変わらない。このような時代だからこそ、子どもの成長や人間の生き方、そして自然や平和に対する考え方など、昔話から学べるものがたくさんありそうな気がする。

(図書係：稲妻晶子)



『昔話が語る子どもの姿』 小沢 俊夫 著

所 在： 学生閲覧図書コーナー
請求記号： 388.04/オサ/学関

出版文化賞

皆さんは、「梓会出版文化賞」という賞をご存知でしょうか。直木賞、芥川賞…出版会に賞は数多くありますが、それらに共通して

いることは、賞を受ける対象が作品や著者であるということです。

それに対し、今回紹介する「梓会出版文化賞」は出版社を対象に贈られる日本で類を見ない賞なのです。この賞は、優れた出版活動を行っている出版社を激励することを目的としています。

第29回を数えた昨年は、紙芝居や絵本の出版で有名な「童心社」が受賞しました。

我が家には幼い娘がおり、必然的に絵本が増えているのですが、その中にひとときわ年季の入った絵本があります。ページはとところ破れ、落書きとシミが沢山あります。それでも、娘のお気に入りです。

この絵本なぜそんなに年季が入っているかという、夫が幼いころ(約30年前)に読んでいたものの「お下がり」だからなのです。気になって奥付を見てみると「童心社」から出版されたものでした。この絵本は増刷を重ね今でも出版されています。

親から子へ世代を超えて読み継がれていくものがある、それを目の当たりにしたと同時に、

「梓会出版文化賞」の事を調べていたからでしょうか、そのような本を出版し続ける出版社があるということに感動しました。みなさんも今度お気に入りの本を読む時に、出版社をチェックしてみてはいかがでしょうか。

(雑誌係：菅原裕生)



『いない いない ばあ』

松谷 みよこ 著
瀬川 康男 絵
童心社

ビブリアバトル

素敵なお本に出会ったら誰かにその本の話をしてみたいですよね。そんなあなたに気軽に楽しめる本の書評合戦「ビブリアバトル」をご紹介します。

ビブリアバトルは、好きな本を持ち寄って、バトル(発表者)とそれを聞く人が集まればすぐにできます。公式ルールがありますが、実に簡単明快！(1)発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。(2)順番に5分間で本の紹介をする。(3)それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。(4)全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員1票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。の4つです。

「本を通して人を知る、人を通して本を知る」がキャッチフレーズになっていますが、まさにその通り。本人が自身を語る以上に本がその人を語ってくれますし、これまで食わず嫌で遭遇できなかった本との出会いもあります。また、バトルと会場のライブ感と一体感がたまらなく面白くて、一度体験するとまたバトルたくなるんです。



著者、バトルってます！

ビブリアバトルは、新しい形の勉強法を模索していた理料系大学院研究室から生まれたものですが、現在は各地で「決戦」が開催され、地方予選を勝ち抜くと全国大会が待っています。

みなさんも「知的な遊び」に参加したくありませんか？

(図書係：八巻千穂)

図書館 15 利用シリーズ

～ 辞書つれづれ ～

『研究社日本語口語表現辞典』編

「辞書を読む」と言う言葉にピンと来ないかもしれません。辞書は調べるもので、味気ないものだと思ってないですか。しかし、辞書には「個性」と「意思」があるのです。

映画化もされた三浦しをん原作の『舟を編む』は、「ひとは辞書という舟に乗り、(中略)言葉の大海原に漕ぎ出す」ために日々辞書を作る人間のドラマを描いたものです。この本は、岩波書店の『広辞苑』をモデルに書かれたようですが、他にも三省堂の2冊の辞書を編纂した2人の男性にスポットをあてた『辞書になった男』はHNKのドキュメンタリーとして放送後、一冊にまとめられました。

日常の話し言葉を扱った『研究社日本語口語表現辞典』は、「アラフォー」や「オールで」といったくだけた表現や流行言葉、若者言葉や、「がびーん」などちょっと古い表現など一般の国語辞典には載っていない言葉が掲載されています。《会話例》もユニークで、「がびーん」の会話例では、岸本先生が締め切りを勘違いし「ガビーン」と言っています。また、付録には省略表現が載っていて、これがまた面白い！「アニソン」、「サラメシ」等が登場し、「路チュー」の例文では、「まったく。路チューで見せつけなくてもいいのに」なんて書かれています。

言葉は常に変化し、辞書が作られた時点ですでにその言葉は古くなっていきます。そういう意味では、辞書は時代を写す鏡です。「辞書を読む」ことは、言葉を味わうことであり、「時代を紡ぐ人々」の思いを読むことに繋がるのではないのでしょうか。

※上記に記載の本は、図書館で所蔵しています。

(図書係：八巻千穂)



図書館からのお知らせ

☆夏季休業中の長期貸出

期間：7月18日(金)～

返却日：9月17日(水)

対象資料：図書

*ベストセラーも含む、貸出冊数は通常と同じ。

変更の際は、図書館内掲示、HP等でお知らせいたします。

☆お知らせ

・図書館キャラクター募集のお知らせ

東北福祉大学図書館では、図書館キャラクターを募集します。

応募期間：2014年5月19日(月)～7月18日(金)

応募資格：本学学生、教職員

作品数：1人(1グループ) 2作品まで

申込用紙：図書館3Fカウンター、1F掲示板

※ 詳細は図書館内掲示、図書館HPをご覧ください。

・ブラウジングルーム内、自動販売機設置のお知らせ

1Fブラウジングルームに飲料水の自動販売機を設置しました！

水分補給はブラウジング内でお願ひします。

－ 編集後記 －

今回のブックレビューは千葉和男先生にご協力して頂きました。また素晴らしい作品集、永井画廊刊『千葉和男画集』の紹介、寄贈して頂きありがとうございました。

さて、新入生の皆さんは学生生活にもう慣れましたか？さわやかな風を感じつつ、もうすぐ梅雨ですね。通学には雨は厄介かもしれませんが、本を片手に図書館で一息するのもお勧めです。講義の合間にふらっと図書館に立ち寄りしてみてくださいね。《五十嵐・菅原・八巻》